

## 企業統治のハイブリッド型

－「稼ぐ力」と企業統治、アクセルとブレーキ－

2014年10月27日

最近、コーポレートガバナンス（企業統治）が新聞などによく登場してきます。なぜでしょう。それは一口に言って、現政権の成長戦略（3つの矢）の一環のなかで出ていること、つまりそのなかでとらえることが重要です。

企業統治はよく自動車の制御装置（アクセルとブレーキ）にたとえられます。自動車＝企業というわけで、その制御装置という仕組みが企業統治というわけです。

その制御装置がアクセルとブレーキからなるなら、いずれに重点が置かれるか。ここが1つの見方です。アベノミックスの成長戦略の一環ですから、むしろアクセルの方です。

その点は、例えばこの6月に公表された「日本再興戦略」において、企業統治が「稼ぐ力」の1つの課題としてあげられている点に端的にでています。

特に、「グローバル水準のROE（自己資本利益率）の達成等を一つの目安に」としている点は、それが株式市場志向の成長戦略のなか、つまり市場中心志向のなかでとらえられています。

しかし、企業統治は企業＝組織である以上、もともとは「市場」よりも「組織」がベースだといえます。図式的示しますと、いわば組織の外の機関投資家の視点（市場）→企業経営（組織）→稼ぐ力→成長戦略、となります。この出発点をおさえておくことが重要です。

神田秀樹教授は株主視点を加えた「ハイブリッド型」を目指せと主張されています（10月27日日経新聞）。興味深いところですが、やはりそこには市場重視の視点が起点にうかがえます。

問題はそこでいうところの「ハイブリッド」、とりわけそれがどこから出てくるかです。

先に市場と組織という視点を示しましたが、この市場と組織のハイブリッドという捉え方をすると、比較的わかりやすのではないかと思います。

実は、現代の企業会計もハイブリッドな形として見ることができます。

そして、法も会計もそうしたハイブリッドな形になってくるのは、その基礎に実体経済と金融経済の関係、とりわけ金融経済の実体経済に対する優位性という点が指摘されます（注1）。

しかし、私達は実体経済なくして生きてはいけません。金融はそのためにこそあるものです。体内を流れる血液（金融）は身体（実体）あってこそそのものです。

大切な視点は、アクセル優位は金融優位とつながっているということ、そしてもう1つ大切なのはブレーキあってこそそのアクセルという点です。

※注

注1) 拙著『揺れる現代会計』（日本評論社）の4「『会社とは何か』と会計」では（25-27ページ）、「会社＝モノ」（市場）の会計と「会社＝ヒト」（組織）の会計、このハイブリッドとして説明しています。

なお、法も同じく、市場法（金商法）と組織法（会社法）という関係でみることができます。

※付記：7月30日の「ガバナンス、企業価値、現代会計」もあわせてご参照ください。